生涯球道

伝えたいこと Message ㊲

毎週日曜日掲載

元農大二高野球部監督　斎藤　章児氏（72）

戦いは勝者と敗者を分ける。だが、結果がすべてではない。高校野球はひたむきな心を求めるものだという。白球を握る球児に努力、感謝、人の和の大切さをいかに諭すか。指揮官として甲子園を踏むこと6回。野球に心血を傾注した闘将は、一人の教育者だった。

◇　◇

競い合い成長する場

―白球を追い掛け、打ち、投げ、走る。高校球児が全力を尽くす姿が多くの人に感動を与える。

聞き手　運動部長　山形　博志

高校野球の目的は、野球を通じた人格形成にある。そして目標は進学校であれ、実業高校であれ文武両道でなければ高校野球ではない。しっかりとした目的、目標を立てて社会学の基礎を徹底して教え込む場。植え付けたいのは人間として人に感謝し、人を思いやる気持ちだ。

歴史をひもとけば、一高と三高の対抗戦が高校野球を発展させた原点とみる。決して争うのではなく、伝統校が戦いを重ねながら互いに刺激し合い、切磋琢磨する。競い合って成長していくのが本来のアマチュア精神だ。今は勝敗を争うことが前面に押し出され、そういう意識が欠けてはいないか。

―野球をはじめボールゲームは「フォア・ザ・チーム」に徹したプレーが求められる。

機会あるごとに「心のキャッチボール」という言葉を使ってきた。キャッチボールは相手のグラブにボールが収まるまでは自分の責任。自分の手から離れたらあとはボールに聞いてくれというのではだめ。キャッチボールが満足にできない選手が試合で正しい送球ができるだろうか。キャッチボールを身に付けることは、相手に対する礼であり、思いやりの気持ちでもある。野球は打ったり、投げたりするだけの「足し算」ではなく、相手の捕りやすい球を投げ、走者を進める打撃をしようという思いやりが加われば「掛け算」のスポーツになる。

キャッチボールができれば、互いが自分の役割、責任を理解し、連携、協力し合う。相手を思いやり、チームメートに感謝する気持ちが芽生えれば、瞬時に判断する力がつき、それがチームプレーを生む。チームとして勝つために何ができるか。「バックアップ」や「カバープレー」ができれば「負けない野球」につながる。

ただ勝てばよいのではなく、勝利に向かって互いが努力する過程に価値観がある。

（20面に続く）

生涯球道　生涯、野球一筋に生きる。球道は人の道に通じる。これまでかかわってきた野球を、残された生涯でもっと追求していく。（自筆）

昨年6月から始まった毎週日曜付の大型インタビュー「伝えたいこと」は今回で終わります。